

リノリウム

フォトウェディングサービス

Fukapon

「着付け、できました」

「おーけー、立ち位置バミっといたから」

午前三時。

林立するオフィスビルからは灯りが消え、人通りのない通りには彼女たちの声だけが響く。

「はい。——それでは湯川様、こちらへ」

小柄な工藤リセが手を引くのは、やはり小柄な女性。

身長は一五〇センチほど、しかし二人の大きさはまるで違う。

（こんなところで見ると、さすがに異様だなあ）

大柄の人影を正面に見据えて、柏原倫子は心の中で苦笑い。

もちろん彼女はおくびにも見せず、少し屈む。胸元のルーペを拾い、右手に置かれたカメラのピントグラスを確認すると、十二単姿が予定通りに収まっていた。

銀色のビルと色とりどりの着物。そして加わったのは、黒の束帯姿。フレネルを通して見える二人の視線が正対したのを確認する。

倫子は片手を上げて、小さいながらも声を張った。

「湯川様、それではテスト撮影を始めます。フラッシュが光ったあと、十秒数える間は動かないでください」

改めて背筋を直し、キリリと視線を定めた二人。

「はいチーズ！ いち、にー、さん……」

再び響いた倫子の発声に続き、パンと二灯のストロボが光った。

まだ空が暗いうちに片付けまで終わると、倫子とリセは機材を放り込んだライトバンに乗り込んだ。

倫子が車を走らせると、最初の行き先を問うた。

「お疲れさま。衣装はリセの家に運ばいいの？」

「はい。私物ですから」

「えっ？ そうだったの？」

彼女はハンドルを握ったままに驚くと同時に、やっと納得した。十二単をレンタルすれば数十万はくだらない。それをリセは、ただで構わないと貸してくれたのだ。

「はい。着たことなんて、何度もないんですけどね……」

助手席のリセは驚きに付き合うこともなく、淡々と答えた。

赤信号の一時停止で横を見ると、いつもの涼しい顔が見える。

「ふふっ、リセ、着物に合いそうだよな」

「似合いません。人形みたいになっちゃうんです」

「いいじゃない、お人形さん。さっきのお客様も、リセが来たら可愛いだろうなって言ってたよ？」

透き通るような白い肌、漆黒の髪。

倫子がスツと手を伸ばし、整えられた鬢削ぎに指を滑らすも、リセは表情を変えることなく、窓外を見据えていた。

「嫌ですよ。余計子供っぽく見えるじゃないですか」

顔には似つかわしくない不服を漏らすリセに、倫子は笑みをこぼす。

（ぶくーって膨れっ面を作ってくれたら可愛いのに）

倫子の妄想を口にしたとしても、リセは涼しい顔のままだろう。膨らんで欲しい頬をツンと突くと、彼女は青信号へと視線を戻した。

倫子は車を止めると、胸ポケットからスツと手帳を取り出す。

「私立神田川女子高等学校、間違いないよね……」

自問しながら、手帳の表記とカーナビの表記が一致していることを確かめ、校門の表札を確認しようと助手席の方を向いたとき

リセはドアノブを引きながら、彼女の確認を不要にした。

「神田川女子高等学校、間違いありませんよ。私、さっきまでここにいましたから」

「えっ?」

倫子の驚きを気にすることもなく、リセは両足を車外に流している。

「機材、準備しますね」

今日も涼しい表情のまま、彼女は動き始めた。

一方の倫子はポカンとしたまま、何となく考えてしまう。

(えっと、ここ、リセの学校なの? じゃあ、お客様って……)

同級生がお客様だったとして、リセはどう考えるのだろう。

高校生での結婚はさすがに多くはないが、結婚できないからこそ写真にしたいのかも知れない。倫子たちのお客様には少なくともパターンだ。

ならばリセは、よくわからないが、何となく落ち着かない感じのまま、倫子はお客様に電話をかける。

程なくして現れたのは、倫子と同世代であろうか、二十代後半に見える男性だった。

がっしりとした体躯に浅黒い肌、体育教員であろうか。リセを見て何ら反応がないところを見るに、彼はリセを知らないのだろう。

一方のリセも、顔色を変えることなく、営業スマイルで迎えて

いる。

果たしてリセも彼女を知らないのか気になるところだが、聞くような時間もない。彼女は仕方なく、お決まりの挨拶を始める。

「金田様でしょうか?」

「はい、私がお呼びしました。金田と申します。今日はよろしくお願ひします」

「こちらこそ、よろしくお願ひします。私が撮影を担当します柏原、こちらがアシスタントの工藤です」

己の自己紹介に続き、リセに水を向けると、彼女はいつも通りに挨拶をしている。

「工藤です、よろしくお願ひいたします」

「早速ですが、駐車場は裏手になります。壁伝いに進んで、入ってきてください」

「わかりました」

金田の指示に従うべく、倫子は改めて運転席側に回り、ドアを開ける。

リセは背後にあった助手席に、一足先に戻っていた。ボタンと二人同時に扉を閉めて、指示通りに徐行。

同時に倫子は、口を開いた。

「リセは、金田さんのこと知ってるの?」

「はい。二年生、私の一学年下の体育を担当しています」

リセの答えを、倫子は車を左折させ、前を向いたままに聞いた。彼女はやはり、いつも通りの調子だ。だから倫子は答えなど気にせず、彼女に返した。

「この仕事、嫌なら降りてもいいよ。一人でもやれるからさ」

「いえ、仕事はちゃんとやります」

入り口の前に着て一時停止。同時に倫子が左を伺うと。

「……相手を見たら、変わるかも知れませんが」

リセは黒髪を揺らしながら、笑顔を覗かせた。

目を合わせた倫子も微笑むと、ゆっくりと校内へと侵入した。

駐車場に入ると、すでに金田が待っている。走ってきたのだから、しかし息が上がった様子がないことに、倫子はさすがに体育

教師と感心した。

「こちらになります」

彼の先導に、ローリングケースを従えた二人は続いた。

廊下を歩きながら、倫子は何か物珍しげに、きよろきよろと辺りを見回す。

金田はすぐに彼女に気付くと、笑顔で聞いた。

「学校、珍しいですか？」

「はい。夜の学校、高校って歩いたことがなかったの」

「そうですね。生徒は普通、残りませんから」

答える彼の笑顔に、影が落ちる。

正直な正確なのだろうか。その態度は露骨だった。もちろん二人とも気付いた。

「お相手の方は、生徒さんですか？」

事もなげに問うリセは営業スマイルを維持している。

金田は彼女が生徒だと言うことも知らないのだろう。撮影前の身の上話とばかりに、苦笑をしながらもあっさり答えた。

「はい。さすがに籍を入れるとか、式を挙げるとか、もう少し待たないとなりませんか。写真ぐらいはと。」

「素敵ですね。新婦の金田様にも喜んでいただけるよう、素敵な写真を撮らせてください」

「ありがとうございます。でも、芽衣子はまだ『金田』じゃないんですよ」

苦みより喜びが勝る口調で返された言葉に、リセの表情が変わることはなかった。

倫子はリセの知らない子なのだろうと思ひ、ドアを開けられた教室へと入った。

「えっ？ リセ——」

しかし迎える声は、リセを呼んだ。

「リセがこんなバイトやってたなんてねー」

「私だって、芽衣子の結婚写真を撮るなんて思わなかったよ」

撮影を終えて、ウェディングドレスを着たままの女子高生が、スーツを着たまの女子高生と並んでいる。

まさに女子高生が二人。その間には新郎の金田すら入っていないと判断したようで、彼はとうに退散してしまった。倫子もとても加われないなど、片付け終わった機材を眺めて教室の隅にいた。

(リセもいつか、結婚するのかな)

倫子は想像の中で、芽衣子のウェディングドレスをリセに重ねた。

細身の彼女は、何を着ても似合う。もちろんウェディングドレスだって完璧だ。

無駄のないラインの後ろ姿に微笑むと、真っ白なドレスがふわりと舞った。芽衣子が立ち上がり、倫子の方に振り返った。

「済みません、リセと撮ってもらえませんか」

彼女を慌てて止めようとするリセの表情を、倫子は初めて見た。

知らない彼女が撮れるならお安いご用。

「喜んで。お友達との写真ですね？」

これはよくある仕事のワンシーン。申し訳なさそうにするリセに、倫子はそう伝えたとつもりだった。

しかし届かなかったのだろうか。

予備のカメラを取り出し、ストロボを取り付け、アイレベルのフラインダーを覗いてもまだ、見慣れぬ表情のままだった。

「リセ、笑って」

「リセったらまじめだからなー。仕事サボってるのが気になるんですよ」

倫子の呼びかけに返ってくるのは、営業スマイルにすら及ばぬ笑顔。

学校でのリセを見られるかと思っていたので残念だったが、これはこれで芽衣子にはよい思い出になるだろう。

「私のせいでごめんなさい。でも、貴重な体験が残せますよ。では、撮りまーす」

写したのは芽衣子から見ても、倫子から見ても、いつもと違うリセだった。

†

「ごめんね、夜のバイトだからって手伝ってもらってるのに」

二人を乗せたライトバンに、西日とは言え、珍しく日の光が差ししている。

眩しそうに目を細めながら運転する倫子の横には、今日も涼しい顔のリセが座っていた。

「いえ、私こそ制服のままで済みません」

いつもは白のブラウスに黒のパンツスーツだが、今日は紺色のブレザーに赤いタータンチェックのスカート。

今日何度目かの信号待ちになり、倫子はまた、横目で彼女の脚を見てしまう。

「そんなにおかしいですか？ 私のスカート姿」

こっそりと見ていたつもりだったが、リセにはすっかり気付かれていた。

倫子は予想外の状況に苦笑せざるを得ない。

「おかしくなんかはないよ。でもほら、気になっちゃうんだよね。なんて言うか――」

「短いスカートから伸びる女子高生の生脚が気になっちゃうんですね？」

「それは、そうなんだけど……」

視線を戻してアクセルを開けると、彼女はスツと、スカートの裾を引きずり上げる。

「もっと上も見ます？ 何でしたらパンツも……」

「やめてやめて。今はダメ、ちゃんと前見ないと」

倫子はリセの言葉に慌てながら、前方に意識を集中する。

パンツもだなんて、リセはいったい何を考えているのだろう。

倫子は頭の片隅で悩んでしまう。

しかし彼女は、何を見たいのか悩むに至らぬまま、目的地で車を止めた。

「公園、ですか？」

「そう、今日は公園でお仕事です。二人とも新婦だから気を付けて」

倫子は問いに答えながら、事前打ち合わせに用いるお客様情報シートをリセに渡す。

「はい、これ。女性同士ってことと、前回に続き高校生と先生ってことがポイントかな。衣装の手当はなしで」

「わかりました」

「おーけー、行こ」

シートに目を落とすリセを見ながら、彼女が先行して車を降りた。

後部の荷室を開け、機材を取り出し振り向くと、ブラウス姿のリセが立っている。

「済みませんが、着替えの時間をいただけませんか」

「あ、着替えしないで。相手が女子高生だから、そのままの方がリラックスしてくれると思う」

倫子は答えながら改めて、リセを見てしまう。

直射日光を受けて余計に目立つ白い脚。視線を上げれば、薄いブラウス一枚の向こうに透ける肌。下着の色を出したりしないのは彼女らしい。

リセはもちろん、倫子の視線に気付いていた。

車外に置かれたローリングケースに手を伸ばした彼女はうつすらと笑った。

「仕事終わったら、たくさんお見せしますね」

倫子は慌てて荷室を閉じて、彼女を追った。

「ありがとうございました」

「こちらこそ、ありがとうございました。私のセーラー服、驚いたでしょう?」

すっかり日も落ち、倫子が撮影終了の挨拶をしたとき、ついにこの話題が解禁となった。

「正直に申しまして、多少は……」

素直に苦笑いを返した倫子に、新婦の先生も苦笑っている。

「あの子がどうしても言うから。でも、楽しかったかな。それじゃあ失礼しますね」

「ありがとうございました」

倫子とリセは改めて頭を下げた。

頭を上げるとまだ、手を繋いで公園をあとにする二人が見えた。「素敵なカップルでしたね」

倫子が声の主を見ると。

リセはすでに、倫子を見つめていた。

「うん。二人とも幸せそうだった。いい写真も撮れたと思う」倫子は微笑むと、機材の方へと歩んだ。

しかしリセの声は続いた。

「私を撮ってくれませんか。今、ここで」

「えっ?」

小さく驚いた彼女に、リセはさらに驚きの材料を重ねる。

「倫子さんと、一緒に写真」

言葉を切ったリセに、倫子はお揃いの、とびっきりの笑顔で答えた。

「わかった。撮ってあげる! ほら、こっち来なさい」

「はい」

制服姿の二人が並んでいた場所に、今はリセが立っている。

倫子はいくつかの機材の操作をすると、リセに飛びかかった。

「きゃっ、そんなにくっつかないでください!」

「いいのいいの。はいチーズ」
夜の公園に今一度、ストロボが灯った。

あとがき

あのね、世の中には「起承転結」って言葉があるんだよ？
と言いたくなる日曜早朝なのです。

小説で姫カットは厳しいだろ。毎回そう言いながらも、姫カットを鍵にしてみました。しかし今回はついに、その捻りすら入れられず……。リセは姫カットなんだけどね！ 一応描いたけどね！ 全然役に立ってないよね！

まさかの重大故で、前日夕方から当日早朝までしか時間がなかった今回。本当は書き足したい書き直したいんだけど仕事行かないといけないの。書きっぱなしで出すの。誤字とか許してとは言わないから見逃して。

予定通り終えられたら、午後、十三時とか十四時あたりから頒布できてると思います。頒布できてなければ、この文章が読まれることはないと思います。えー。

ちなみにラストシーン、倫子はどうやって撮影したか。おわかりでしょうか。カメラから彼女たちまで届くリモートリリースはありません。

今度、実際にやってみようかな。

二〇二二年九月一六日、今週二度目の徹夜にぐったりしながら。

リノリウム フォトウェディングサービス
Fukapon

2012年9月16日 初版発行

発行所 まにふいくみやほか
印刷／製本 project KAIGO

Copyright © 2012 Fukapon <fukapon@projectkaigo.org>
<http://www.projectkaigo.org/>